

編集後記

井上郡康

我々は今回の取材を通してさまざまな人間模様を見てきました。千年に一度という大震災において人の数だけドラマがあり、そこには困難にも立ち向かおうとする人間の姿がありました。

過去より津波被害を受けてきた東北地方の沿岸部には、先人たちが私たちに警鐘を鳴らすさまざまなものを残しています。我々は先人たちが残してくれたように、この時代を生きた人間の責務として後世に伝える努力をするべきだと考えます。

また震災後、ライフラインが全てストップした町では持続可能な社会が途切れ物資不足など当たり前のありがたさが身に染みて実感できたと思います。

電気が全て消えた町の空には満天の星が輝いていました。その時、私たちは星空を見て何を感じていたのか絶対に忘れてはならないと思います。

佐々木雅博

東日本大震災から1年が経過しました。改めて震災により亡くなられた方々に哀悼の意を表するとともに、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

この1年をとっても長かったと感じる方、もう1年経ったのかと感じる方、人それぞれ感じ方も異なると思います。

震災直後、何かしなければ、何かできることはないかと手探りの状態でこの企画は始められました。まだまだ普通の生活が困難な状況であった時期にも関わらず、また当時の体験を語る時、その時のつらい状況を思い出してしまうような状況の中にもかかわらず、多くの方々にご協力いただくことができ、掲載件数も40件を数えようとしています。

お話を伺っている中で感じたことは、自身も被災されているのに、自分はまだ恵まれていると、自らのことはさて置き、他を思いやる心を皆さんがお持ちであることでした。その都度、人と人のつながりのすばらしさを改めて感じさせられる機会でした。

三浦 純

東日本大震災は、人類が経験した最大級の自然災害に加えて、世界最大規模の原子力発電所事故が伴った災害で早1年が過ぎました。自然の猛威の前に、私たちの世界は、たちまちコントロールを失うことを、深く思い知らされました。多くの命と築き上げてきた営みが一瞬にして奪われた現実を前に無力感が募り、生まれ育った故郷や親しんだ光景の変わり果てた姿に声も出ませんでした。

そこで、この大きな災害を後世に伝えるべく、私たちは、行政、環境に携わる方々が震災当時の様子や、その後、どのような行動をしたのかを取材してきました。震災直後、災害の傷跡が生々しく残る被災地で取材を受けていただいた多くの方々に、取材をお受けいただいた感謝の思いと、悲しみに負けず必死に前を向く姿に、胸が熱くなりました。幸い生き延びることのできた私たちには、生き延びた者として犠牲になった方々へ、恥じない生き方をしなければならないと深く考えさせられました。

3月11日を境に、日本は生まれ変わらなければならないのです。今、こうして生きていられる事・毎日仕事ができている事・毎日大切な家族と過ごせる事。今まで当たり前と思っていた事をもう一度考え直してみたいと思います。

鈴木美紀子

自宅で、公民館で、避難所で。いろいろな場所でお話を聞きました。ハンドルを握りしめて瓦礫の山の間に来た道を通り、大きく陥没した穴や飛び出したマンホールを避け、どこが道なのかわからないガタゴト道を通り。見覚えしている記憶の中の土地と何一つ重ならない目の前の光景に、喪失感ばかりが感じられました。

東北の人は我慢強いと言われましたが、実際はどうでしょう。電気もガスも水道もなく満身に食べられなくても、家があり家族がいて布団で眠れてどうして不満を言えたのでしょうか。ただ生きることに精いっぱいだった日々の中で、本当に大事なものは何であるのかを思い知らされました。だから「あなた達だって大変なのだから」と言われても、誰もが首を横に振ったのです。本書はその当時のことを伺った貴重な体験談です。多くの人にじっくり読んでほしいと思います。あの時何があったのかを知り、もう一度暮らしや地域や社会のことをよく考えてもらいたいと思うのです。

手探りで始めた本活動は、「たくさんの人に伝えて」と逆に皆様に後押しされて継続することができました。「EPOさんもがんばってね」と笑って見送ってくださる皆様の姿に、『笑う門には福来る』をしみじみ感じた1年でした。
